

2022 年夏季の北湖沿岸域における稚エビの生息状況

大前信輔・佐々木賀治

1. 目的

スジエビは琵琶湖の重要な水産資源の一つである。着底後の稚エビ密度はスジエビ資源の加入量の指標候補と考えられるため、稚エビの生息状況調査を実施した。

2. 方法

2022 年 7 月 21 日、8 月 23 日および 9 月 16 日に、長浜市大浜地先、彦根市松原地先と薩摩地先、近江八幡市長命寺地先、大津市真野地先および高島市大溝地先の水深約 8m で、ビームトロール網（ビーム長 3m、袋網目合 1.4mm）による稚エビの採集調査を行った。なお、大浜と真野での 7 月の調査が欠測となった。曳網時間は 6 分、曳網速度は約 1.5km/h とした。また、携帯型 GPS にて曳網開始地点と終了地点を記録した。採集したサンプルは現場にて 10%ホルマリンで固定して試験場に持ち帰った。概ね頭胸甲長 3mm までのスジエビを稚エビとして計数した。携帯型 GPS の記録から曳網距離を計測し、これにビーム長を乗じて曳網面積を算出し生息密度を求めた。

3. 結果

地点別の稚エビの生息密度を図 1 に示す。2 回または 3 回の調査の平均密度が最も高かったのは大溝地先（1.55 尾/m²）で、最も低かったのは大浜地先（0.13 尾/m²）であった。生息密度は湖西水域（大溝地先、真野地先）で高く、湖東水域（大浜地先、松原地先、薩摩地先および長命寺地先）で低くなる傾向がみられた。

月別生息密度の変動パターンは地点により異なった。大溝地先と長命寺地先では 8 月が最も低く、薩摩地先と松原地先では

8 月が最も高かった。

松原地先と真野地先では生息密度の変動幅が大きかった。松原地先では、8 月の生息密度が 7 月の約 6 倍であった。真野地先では平均生息密度が 0.91 尾/m²と 2 番目の高さであったが、8 月は 9 月の 35 倍以上の密度であった。

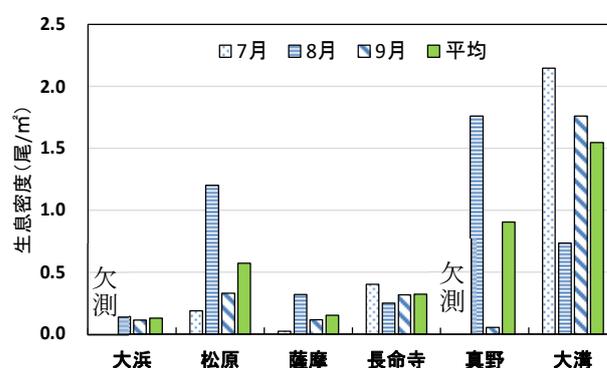


図 1 地点別の月別生息密度と平均地点生息密度

全地点における月別平均生息密度を図 2 に示す。全体的な傾向として 7 月と 8 月は同水準で 9 月になると減少した。

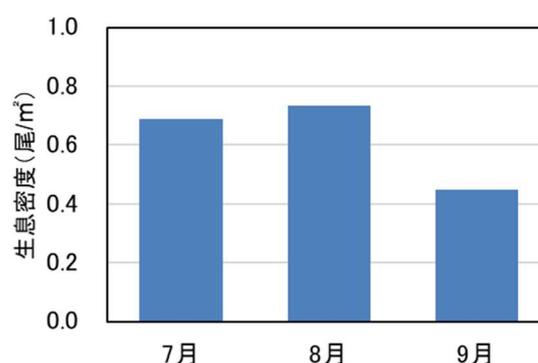


図 2 全地点における月別平均生息密度